

2－3．自然環境特性

1) 本緑地の自然環境の概要

基本計画策定にあたり、「鎌倉市自然環境調査」（平成 15 年 3 月）の報告から時間が経過していることを踏まえ、本緑地の現状及び過年度調査時からの変化の状況を把握し、基本計画に反映するため、本緑地の昔の姿を熟知されている方や台峯保全連絡会の方々とともに、現況の概要確認を行った。

(1) 植物（資料編 p1 参照）

■調査結果のまとめ

植物については、「鎌倉市自然環境調査」（平成 15 年 3 月）において報告された植生区分図に対し、森林植生については大きな変化は見受けられないが、植生遷移や水分条件の変化等によって植生が変わってきている箇所が確認された。

【植生の主な変化】

○谷戸部全体

- ・谷戸部全般において、アズマネザサ、アオキ、ヤマグワ等が増加しており、低木層を形成する部分が顕著となった。

○ハンノキ群落の状況

- ・台峯の谷戸の最奥部のハンノキ群落の林床に、アオキ等が増えている。
- ・ため池上流側の特徴的なハンノキ群落については、ため池に近い林床部に、セリ・ハンゲショウ等の生育が見られる。
- ・ため池下流側に見られるハンノキ群落については一部に衰えが見られる。

○オギ群落の状況

- ・カナムグラの絡みつきにより広範囲で衰退している。なお、このエリアは平成 17 年 5 月に土地所有者により下草刈りが行われており、これによりカナムグラが繁茂したものと考えられる。（植生区分図に反映）

○スギ・ヒノキ植林の状況

- ・間伐を行っていないため、成長が悪く、幹が細い。

○その他の状況

- ・保全、活用すべき資源としてサクラの大径木の分布が確認されている。配置については、「現況の概要②（p24）」に示す。

以上のような現況確認の成果と航空写真（平成 16 年撮影）からの読み取りにより、「鎌倉市自然環境調査」（平成 15 年 3 月）において報告された植生区分図の区分線の微調整を行った。



拡大傾向にあるカナムグラ群落（倉久保の谷戸・平成 18 年 10 月 19 日）



谷戸のオギ群落（倉久保の谷戸・平成 18 年 10 月 20 日）



尾根道のサクラの大径木（梶原入口からの尾根道・平成 19 年 4 月 10 日）

この植生分布図は、基本計画策定にあたり「鎌倉市自然環境調査」（平成15年3月）の報告から時間が経過していることを踏まえて現況確認を実施し、基本計画段階における植生区分として、自然環境調査（平成15年3月）の植生区分を微調整したものである。



- 凡例
- | | |
|--------------------|------------|
| 1 ヤブ コウジ-スダジイ群集 | 13 杉 群落 |
| 2 ハンノキ群落 | 14 シロソノ 群落 |
| 3 スダジイ-コナラ群落 | 15 竹林 |
| 4 オシハ-リーコナラ群集 | 16 杉・ヒノキ植林 |
| 5 ミズキ群落 | 17 クヌギ 植林 |
| 6 ミズキ群落イナゲ 下位群落 | 18 マハシ植林 |
| 7 アカハ-シロ-カスガ-ショウ群落 | 19 ススキ群落 |
| 8 アス マネザ-リ-クス 群落 | 20 樹木植栽地 |
| 9 アス マネザ-リ群落 | 21 畑地雑草群落 |
| 10 かんぐラ群落 | 22 水田 |
| 11 路上雑草群落 | 23 緑の多い住宅地 |
| 12 ヨシ群落 | 24 開放水域 |

図2-23 植生区分図 S=1:4000

(2) 動物（資料編 p3 参照）

■ 調査結果のまとめ

「鎌倉市自然環境調査」（平成 15 年 3 月）において報告された種を参考とし、現地調査により本緑地において、以下の種が確認された。

鳥類については、「鎌倉市自然環境調査」（平成 15 年 3 月）で確認された貴重種であるトビやフクロウ、カワセミなどが確認された。また、両生類では貴重種であるニホンアカガエルやシュレーゲルアオガエルが確認されたことから、多様な生態系が保たれていると判断された。

表 2-2 動物調査結果 ○○○：外来種

動物種	確認された種
哺乳類	モグラ、 <u>タイワンリス</u>
鳥類	エナガ、スズメ、シジュウカラ、トビ、ヒヨドリ、メジロ、ウグイス、カケス、ハシブトガラス、コガモ（ため池）、アオサギ（ため池）、キジバト、 <u>コジュケイ</u> 、アオゲラ、ヤマガラ、ハクセキレイ、カワセミ、 <u>フクロウ</u> 、オナガ、 <u>モズ</u> 、コゲラ、キセキレイ、 <u>カワラヒワ</u> 、 <u>ガビチョウ</u>
昆虫類	モンキチョウ、 <u>アオマツムシ</u> 、マダラカマドウマ、センチコガネ、キチョウ、ヤマトシジミ、イチモンジセセリ、オンブバッタ、モンシロチョウ、コカマキリ、ウラギンシジミ、クロウリハムシ、フキバッタ、ニホンミツバチ、アブラゼミ、カネタタキ
両生類	<u>ニホンアカガエル</u> 、アマガエル、 <u>シュレーゲルアオガエル</u>
爬虫類	カナヘビ
その他	マシジミ、カワニナ、サワガニ、 <u>アメリカザリガニ</u>

：神奈川県レッドデータ種（2006 年版）

フクロウ：繁殖期・準絶滅危惧

モズ・カワラヒワ：繁殖期・減少種

ニホンアカガエル：絶滅危惧Ⅱ類

シュレーゲルアオガエル：要注意種

水生動物（魚類、貝类等）については、以下の種が確認された。

表 2-3 魚類・貝类等の調査結果 ○○○：外来種

	生息確認種	確認位置	備考
魚類	コイ	ため池	人為移入
	<u>タイリクバラタナゴ</u>	ため池	人為移入
	<u>ホトケドジョウ</u>	台峯の谷戸の水路	
貝類	マシジミ	ため池～台峯の谷戸の水路	
	カワニナ	台峯・倉久保の谷戸の水路一帯	
その他	コシアキトンボ幼虫	ため池の落ち口下	
	オオユスリカ	ため池の最深部に多数	

：神奈川県レッドデータ種（2006 年版） ホトケドジョウ：絶滅危惧ⅠB類

・コイ

人為的移入と考えられ、確認されたのは、白っぽい大きな（全長 60cm 程度：目測）1 個体である。

・タイリクバラタナゴ

タイリクバラタナゴ自体が外来種であり、日本国内での分布は全て人為によるものであるため、本ため池においても人為的移入であると考えられる。

・ホトケドジョウ

ため池より下流の水路で確認された。

・マシジミ

ため池の流出口から台峯の谷戸までの水路で多数確認された。かつては、ため池内でも大型の個体が多数見られたということであるが、今回ため池内では確認することができなかった。

・カワニナ

台峯、倉久保の谷戸全体で多数が確認された。

・その他

底質調査及び生物調査時に、ため池においてコシアキトンボの幼虫数匹とオオユスリカが大量に確認された。オオユスリカの幼虫は、底質内に生息し、プランクトンの死骸などの有機物やバクテリアを食べる。

なお、「鎌倉市自然環境調査」（平成 15 年 3 月）によれば、前記した種以外に、ため池でモツゴ、台峯、倉久保の谷戸でクロヨシノボリの生息が確認されているが今回の調査では確認することができなかった。ただし、今回調査は、11 月 30 日という時期であり、魚類等の活性が低い時期のため確認されなかった可能性もある。



ノスリ
（台峯の谷戸・平成 18 年 12 月 29 日）
（写真提供：川上氏（地元在住））



シュレーゲルアオガエル
（倉久保の谷戸・平成 18 年 10 月 19 日）

(3) 水質（資料編 p4～p11 参照）

■調査結果のまとめ

本緑地における水環境の保全対策を検討するため、各谷戸部流れ・ため池・水源において水質の分析の調査を行った結果を以下に示す。

表 2－4 水質調査のまとめ一覧

調査箇所	水質調査のまとめ
谷戸部	倉④においては、特に懸濁物質が 52mg/ℓと高い数値を示している。 懸濁物質は、清浄な河川では粘土分が主体で、汚濁が進んだ河川では有機物の比率が高い。本緑地の最下流部に当たる倉④には、上流部からの土砂（粘土）や有機物などが流入していることなどが考えられる。
	台①においては、大腸菌数が 24000MNP/100mlとその他の調査地点や環境基準値と比べても、高い値を示している。 大腸菌群には、糞便性ではない大腸菌群もあり、直ちにその水が危険であるとはいえないが、多数検出されることは、し尿による污染を受けた可能性が高いと考えられる。ただし、現行の大腸菌群測定法では、糞便由来の大腸菌群以外の様々な土壤細菌も検出してしまうため、高い値となることもある。
	清①においては、特に総窒素と硝酸態窒素が、台峯・倉久保の各地点に比して、高い値を示している。 総窒素は、富栄養化の指標であり、窒素化合物を多く含む水が湖沼等の閉鎖性水域に流入すると、その水域の富栄養化が促進されることになる。
ため池部	溶存酸素量は3.4mg/ℓで他の地点（谷戸部）よりも小さい値を示し、溶存酸素飽和度（％）も小さい状態である。 総窒素は1mg/ℓを越え、アンモニア態窒素についても他の調査地点（谷戸部）より高い値を示している。 溶存酸素量が少ないことから、嫌気性微生物による分解が進み、アンモニア態窒素の値が高くなっていると考えられる。

- ・今回水質調査を行った地点のうち、台峯の谷戸、ため池、台峯の谷戸の湧水部、倉久保の谷戸の流末については、鎌倉市自然環境調査（平成 15 年 3 月）において、ほぼ同様の地点で水質チェッカーやパックテストといった簡易な水質調査が行われており、その結果と今回調査の結果に大きな差は見られず、この地域一帯の水環境が、ここ 5 年で特に変化していないと考えられる。
- ・水質調査については、季節、天候、測定値の状況によって数値が変化する事を留意する必要があるため、調査に関しては、今後継続して実施することが望ましい。

(4) 底質（資料編 p12～p19 参照）

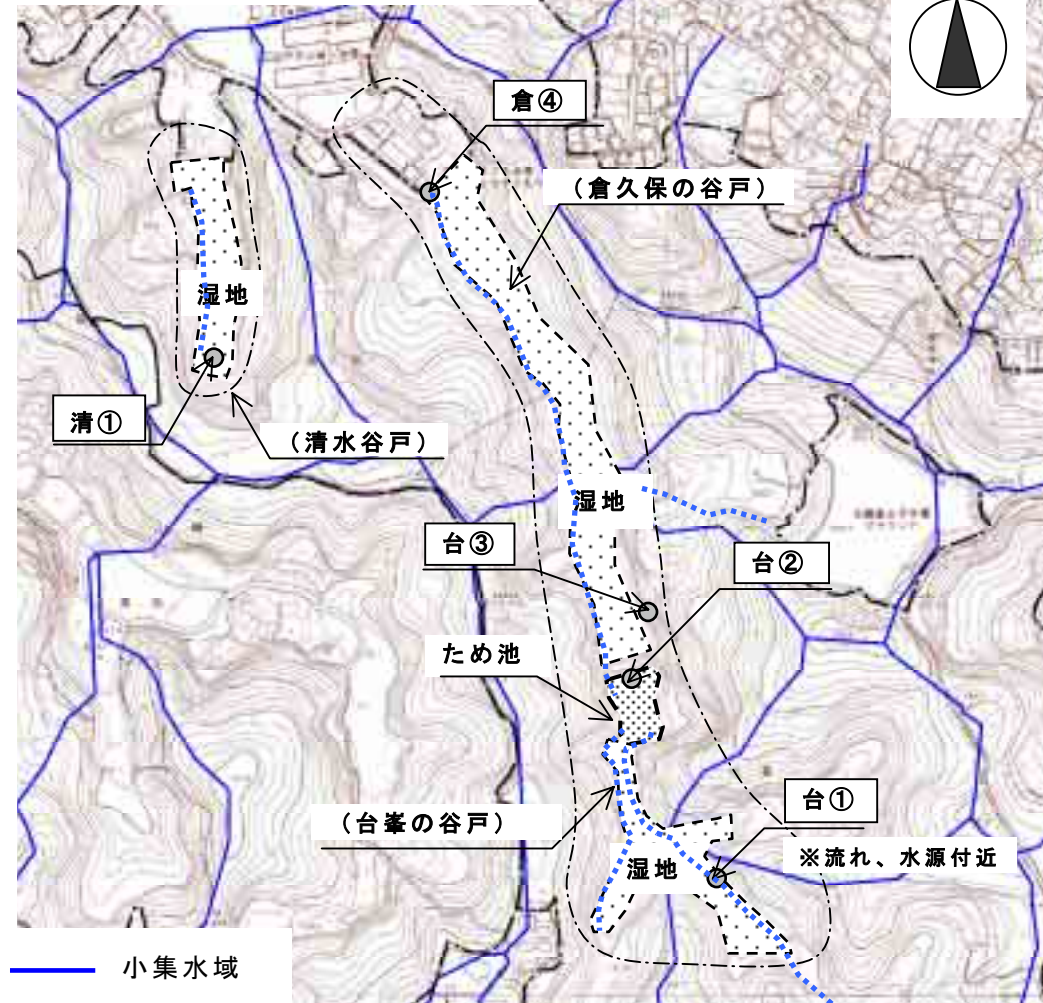
■調査結果のまとめ

本緑地における水環境の保全対策を検討するため、ため池における底質の状態について調査を行った結果を以下に示す。

表 2－5 底質調査のまとめ一覧

調査項目	底質調査のまとめ
水深・泥深	水深・泥深は池の縦断方向及び横断方向の 38 地点で測定を行った。水深はため池の中央部で深く、周縁部でやや浅くなっており、泥深は最厚部で約 1.45mであった。 また調査結果より底泥量を算出すると約 1,200m ³ （概算数値）堆積していると想定される。これらの底泥は、泥深の計測の際に、粒度の細かい粘性土や枝葉等が採取されたことから、それらが沈殿・堆積したものと考えられる。
底質	底質の分析結果は、「土の粒度試験」結果から、シルト・粘土分が 99%に達するような細粒質の粘性土となっている。 強熱減量は、26.5%と多くの有機物を含んでいることを示している。 また、生物調査からも酸素が少ない底泥において見られるオオユスリカの幼虫が確認されていることから、ため池の底泥は、酸素が欠乏している状態であると考えられる。

図 2－24 水質・底質調査地点位置図



(5) 土壌（資料編 p20～p26 参照）

■調査結果及びまとめ

本緑地における植生の立地環境（土壌条件）を把握し、植生や水環境の保全、管理の検討に資するため、代表的な植生である 4 地点で土壌断面や物理的性質調査について実施した結果を以下に示す。

図 2－26 土壌調査地点位置図



○調査地域の土壌概況

本緑地の丘陵斜面には、三浦層群・上総層群の凝灰質岩石や関東ロー層がみられ、その風化物を母材とする褐色森林土が分布する。母材の特徴を反映して全般に細粒質であり、土性は強粘質であるのが特徴である。地形に基づく環境勾配（水分状況）に応じて、尾根筋の丘頂緩斜面から上部谷壁斜面等の乾きやすい場所や急斜面には乾性褐色森林土や適潤性褐色森林土（偏乾亜型）が主として分布し、下部谷壁斜面や谷頭凹地には褐色森林土が分布している。さらに谷底湿地にはグライ土、灰色低地土が分布している。

特に、本緑地の植生との関連について、以下のように整理する。

表 2－6 植生と土壌の関連まとめ

項目	まとめ
ヤブコウジ-スダジイ群集	本緑地の自然植生を代表する植生であり、頂部緩斜面から上部谷壁斜面の乾性立地に断片的に残存している。主に乾性褐色森林土や適潤性褐色森林土（偏乾亜型）が分布している。
スダジイ-コナラ群落	二次林の中でも比較的自自然度の高い植生であり、上部谷壁斜面から下部谷壁斜面にみられる。主に適潤性褐色森林土（偏乾亜型）や適潤性褐色森林土が分布している。
オニシバリー-コナラ群集	二次林の中で最も広い面積を占めており、頂部緩斜面から斜面下部に広くみられる。主に乾性褐色森林土、適潤性褐色森林土（偏乾亜型）、適潤性褐色森林土など多岐にわたっている。
ミズキ群落、ミズキ群落イノデ下位群落	斜面下部や凹型斜面の適潤～湿潤性の立地にみられる崖崩れや地すべりにより土砂が崩落堆積した崩積土*の適潤性褐色森林土と対応している。
ハンノキ群落、ヨシ群落、ミゾソバ群落	谷底湿地にみられ、主にはグライ土と対応している。
オギ群落	谷底湿地にみられ、主に灰色低地土と対応している。

* 崩積土とは、土壌の堆積様式（土壌のもとである母材がどのようにしてそこにたまったのか、すなわち母材の堆積の仕方）の一つで、斜面上方から土砂が崩れ落ちて堆積した土壌をいう。堆積様式には、このほかに残積土（尾根などで、基岩が風化してできた母材がそのままの位置でできた土壌）、匍行土（中腹などで、斜面上方からの堆積と斜面下方への流出が付きあっている土壌）などがある。

○調査のまとめ－水源涵養機能と植生

下表に示すとおり現況林においてはスダジイ林が水源涵養機能においては優れており、これは頂部緩斜面の地形用件、履歴的に長期にわたる有機物収奪を逃れてきたことによる土壌の発達と膨軟化によると推測できる。

表 2－7 植生の水源涵養機能のまとめ

	植生の水源涵養機能の必要条件	本緑地の調査結果
①	複数樹種がともに生育し根系特性の異なる樹群により複雑な根群が表土層を緊縛している。	樹種の豊富さではヤブコウジ-スダジイ群集、スダジイ-コナラ群落、オニシバリー-コナラ群集に大差はないが、スギ-ヒノキ植林では劣る。一般に人工林よりも天然林の方が水源涵養機能が勝るとされる見解と一致する。
②	大型の樹群が多階層の森林群落を形成し、立体的に雨水を捕捉し、さらに雨滴による表土に対する打撃を防止し、穏やかに地表に流下させる。	樹林の大型化と階層構造が発達している。
③	林床植生が発達し、流下水による表面浸食を防止する。	林床植生の発達ではいずれも 4 階層に分化するが、スダジイ林が最も高木層の発達が良い。林床植生について、いずれも低木層は 50%内外と発達するが、草本層は 20%程度と未発達な林分が多く、優劣は付けがたい。
④	A ₀ 層※ ¹ が発達して土壌が直接露出することなく、表面浸食を防止すると共に、腐植の穏やかな浸透により、膨軟な土壌が維持されている。	A ₀ 層の発達と土壌の膨軟性では、A ₀ 層はいずれも厚さ 5cm 内外と差はないが、膨軟性ではスダジイ林が深さ 60cm 付近まで一様に膨軟である点で、他の植生と比較して優れている。

以上の検討から、今後の水源涵養機能向上を目指した森林管理においては、以下の 3 点が重要と考えられる。

- ① 多階層の大型の森林で、かつ高木層の密生が林床植生を衰退させることが少ないという意味ではスダジイ、アカガシ、タブノキ等の常緑広葉樹自然林が優れており、自然林への発達を期待する。
- ② 低木層の密生は草本層の衰退と相まって起こっており、草本層の植被率向上には、5 年に 1 回程度の低木層の攪乱（部分的な下刈り）を検討する。
- ③ ツル植物の高木層への絡みつきは樹群の衰退を招くことから、定期的な巡視管理によりそれを防止する。

※¹ 一般的な土壌断面構成は、図の通りである。土壌は岩石等鉱物質が風化した程度により A₀ 層（堆積層）、A 層（溶脱層）、B 層（集積層）、C 層（母材層）に分けられる。このうち風化物に生物の遺体、植物の腐敗枝や落葉等が分解した有機物が混ざり合って堆積したものを表土といい、A₀ 層、A 層がこれにあたる。

出典：「緑化・植栽マニュアル」中島宏

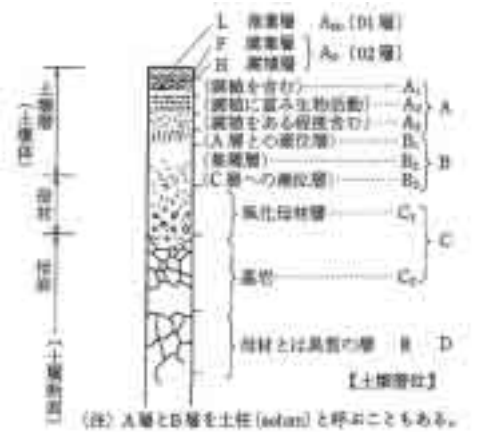


図 2－27 土壌断面構成模式図

(6) 本緑地の現況

概要調査のまとめを以下に示す。



○園路・流れ 位置⑧
洗掘対策が必要。



○滝口
堰等の水のコントロールが必要



○堤・ササ
堤・ササの取り扱いの検討が必要



○谷戸の池
水質改善
泥の堆積処理など検討が必要
夏場についても臭気は無い



○山崎子供会館入口付近
(駐車場、トイレなど設置予定地)



○園路・流れ 位置⑦
ヒューム管の撤去と橋の新設が必要。



○流れ(谷戸の池より下流)位置③
洗掘対策が必要。一部岩が露出



○流れ位置①



○側溝(改修の必要あり)位置④



○湿地 位置②



○ツリバナ(保存すべき樹木)



○ヤマナラシ(保存すべき樹木)



○北鎌倉女子学園がラウンド(トイレ・更衣室あり)
境界沿いに柵が必要
雨水排水が懸念される。



○北鎌倉女子学園入口からの道
(管理車対応の予定)



○北鎌倉女子学園がラウンドからの排水ルート位置⑤



○眺望点よりの遠望
休憩場として活用する必要がある。

山崎小入口

山崎子供会館入口

畑

⑧

湿地

⑦

側溝

⑤

④

湿地

③

⑥

滝口

②

堤

①

湿地

ツリバナ

ヤマナラシ

湿地

畑跡

眺望点

麦藁塚

畑

麦畑跡

梶原入口

谷戸の池

鎌倉中央公園

旧民家跡

北鎌倉女子学園
がラウンド

北鎌倉女子学園入口

西瓜ヶ谷入口

○麦藁塚
本緑地の最高地点
大径木があり、地元の人が
大切にしてきた場所である



○山ノ内配水池入口付近
(駐車場、トイレなど設置予定地)

日当入口

山ノ内配水池入口

凡例

----- 現地調査ルート①

▲ 入口



S=1:5,000

JR 横須賀線

0 100 300 500m

図2-28 現況の概要①



○本緑地西側尾根沿いの斜面林 位置⑨
風によるミズキ類の倒木が目立つ。



○畑 位置⑧
一部が梅林になっている。ウメやカキが植えられ斜面にはヤマザクラも多く、最も里山の谷戸景観を留めている。



○湿地より1段高い平坦地 位置⑦
畑として利用されていたが、現況ではカナムグラが繁茂している。一段下のオギ原ではカヤネズミの研究が行なわれた。



○谷戸の池から北へつづく水路 位置⑥
陸封型ヨシノボリ生育地で、マシジミも多い。



○土留めとして使われていたコンクリートブロック 位置④



S=1:5,000



○平坦地 位置⑩ 鎌倉中央公園内
現況は草本が繁茂して視界を遮っているが、高台の開けた空間であるため、清水谷戸を見渡す展望スポットとして活用可能である。



○畑 位置⑪



○斜面 位置⑫
傾斜による崩壊を防止し、樹木の生育が可能な法面保護工。



○大径木のサクラ 位置⑬
サクラの根元保護と転落防止のため、柵が必要である。



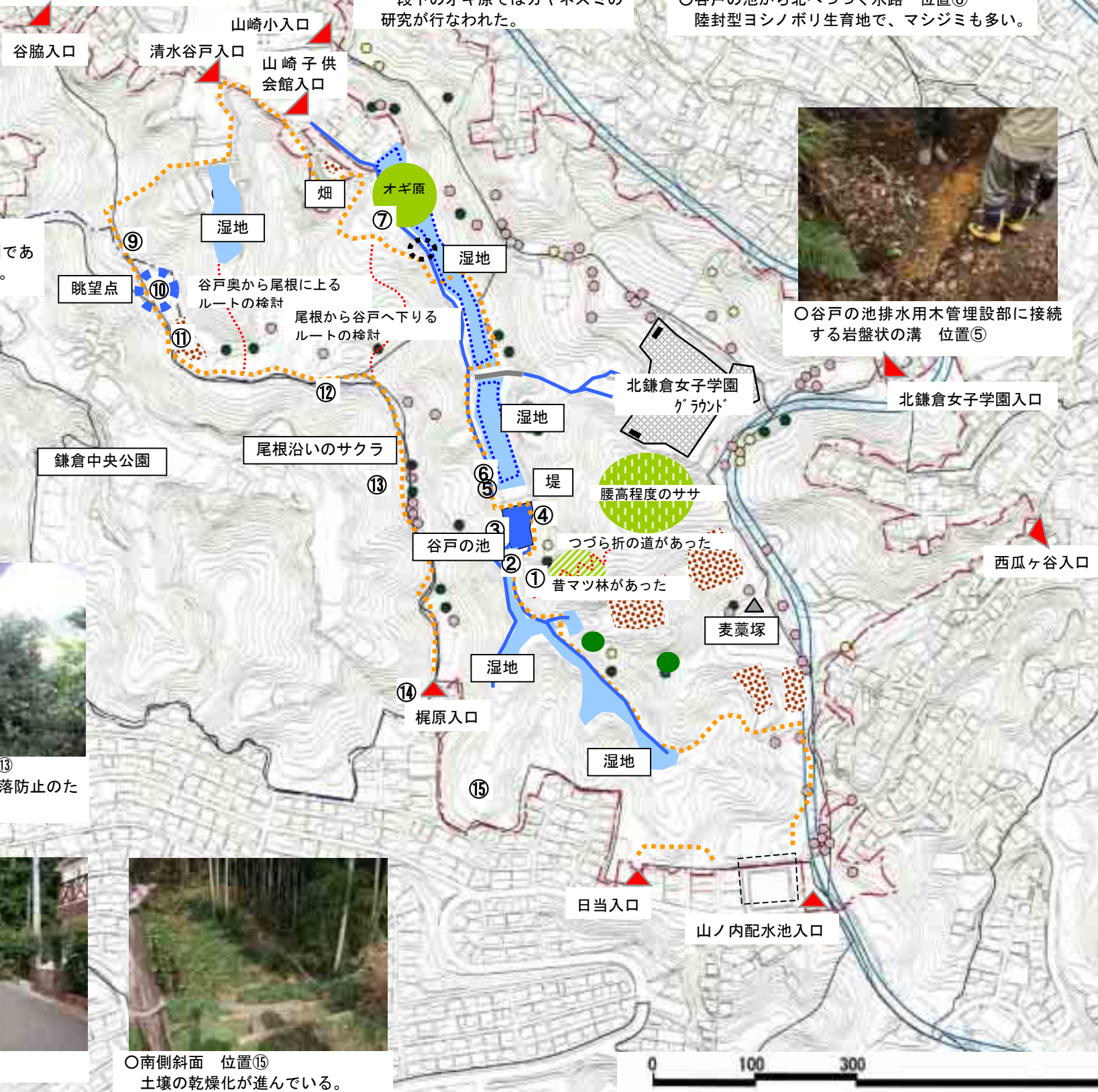
○鎌倉中央公園・梶原口 位置⑭
梶原入口との接続が考えられる。



○梶原入口



○南側斜面 位置⑮
土壌の乾燥化が進んでいる。



○谷戸の池周縁部 位置③
ため池周縁部の一部は岩盤状になっている。



○谷戸の池排水用木管埋設部に接続する岩盤状の溝 位置⑤



○ハンノキ林 位置②



○埋蔵文化財包蔵箇所 位置①
本緑地には多数の埋蔵文化財が確認されているため、取り扱いの検討が必要である。

凡例

- 現地調査ルート②
- ▲ 入口
- オオシマザクラ
- ヤマザクラ
- ソメイヨシノ
- その他樹木

図2-29 現況の概要②

(7) 景観

■本緑地からの眺望（①）

- ・本緑地北東側の乾性草地からは、六国見山や円覚寺、山ノ内や建長寺方面に広がる連続した山々の景観を眺望することができる。

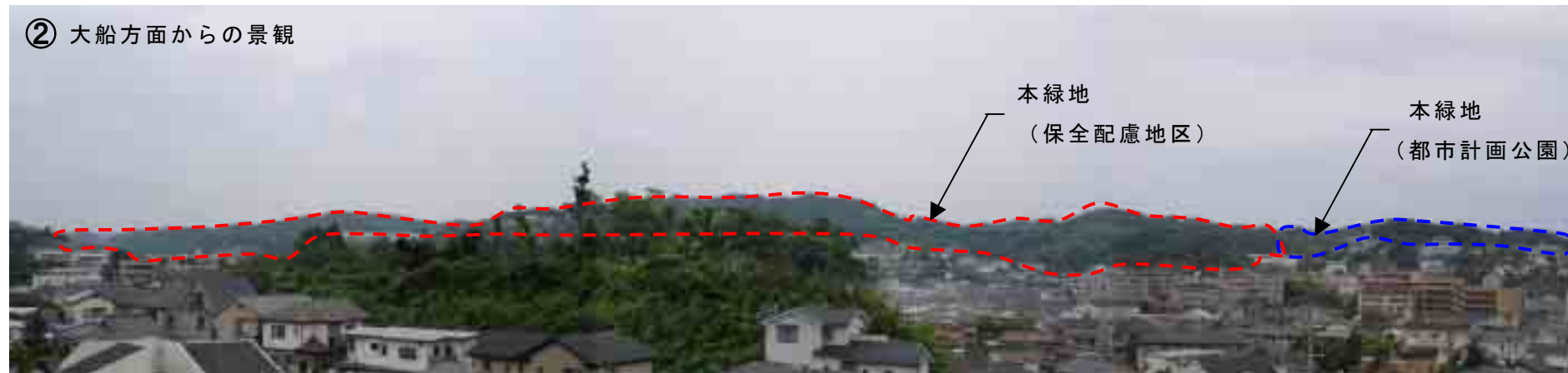
■周辺の視点場からの本緑地の見え方（②、③）

- ・大船方面、円覚寺（雲頂庵）から、緑の連なりとして確認することができる。

① 本緑地からの眺望；六国見山や円覚寺、山ノ内や建長寺方面に広がる連続した山々の景観



② 大船方面からの景観



③ 円覚寺方面からの景観

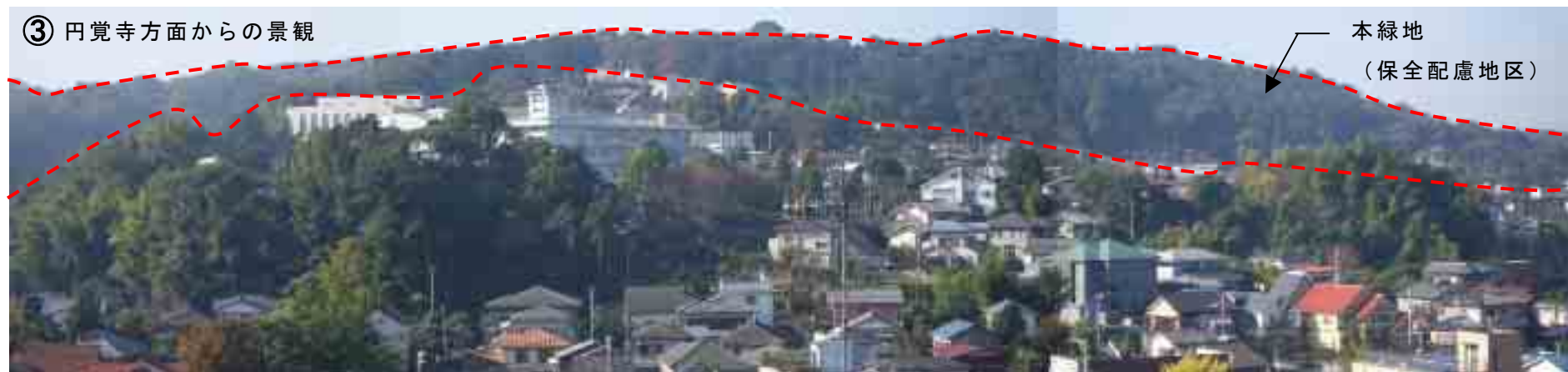


図 2-30 位置図
ベース図出典：鎌倉市 HP 観光マップ

2 - 4 . 市民要望・意見

1) 基本構想における要望・意見の反映の経緯

基本構想は、本緑地に求められている市民の要望、意見を取り入れて策定されたものである。

- 反映した要望・意見
 - ・平成 17 年 3 月に、「鎌倉市緑の基本計画」の改訂作業に伴って行われた現行の施策等に対する市民意見募集から、市民の緑に対するニーズ、意見等
 - ・平成 17 年 4 月 1 日号の「広報かまくら」で募集した台峯緑地の整備に対する意見

なお、これまでの市民の意見の方向性として代表される、平成 17 年 4 月 1 日号の「広報かまくら」により募集した台峯緑地に対する全体的な意見の傾向は以下の通りである。

「できる限りそのまま（48%）」が最も多く、「完全保全（8%）」を含めると約半数がそのままの保全を望んでいる。また、「散策路や標識など最小限の整備に止める」（36%）を望む意見が全体の 1/3 であり、自然環境の保全を望む意見が大多数である。より詳細な市民意見としては、整備方針についての意見が最も多くの意見が寄せられ「自然環境を現状のまま保全する」「動植物の生息場所を保全する」など台峯緑地の自然環境をそのまま保全していくことを望む意見が大多数である。

これを受ける形で施設整備についての意見は「立ち入り禁止区域を設ける」等自然環境の保護・保全を前提とし、最小限の整備に止める事が望まれている。

また、維持管理についての意見として「市民参画による維持管理」、「モニタリング調査」の実施など、整備後においても積極的な関わりを望む声が多く、問題点についての意見は「由比ガ浜関谷線の見直しが必要」等、自然環境に悪影響を与えるものへの関心も強い。

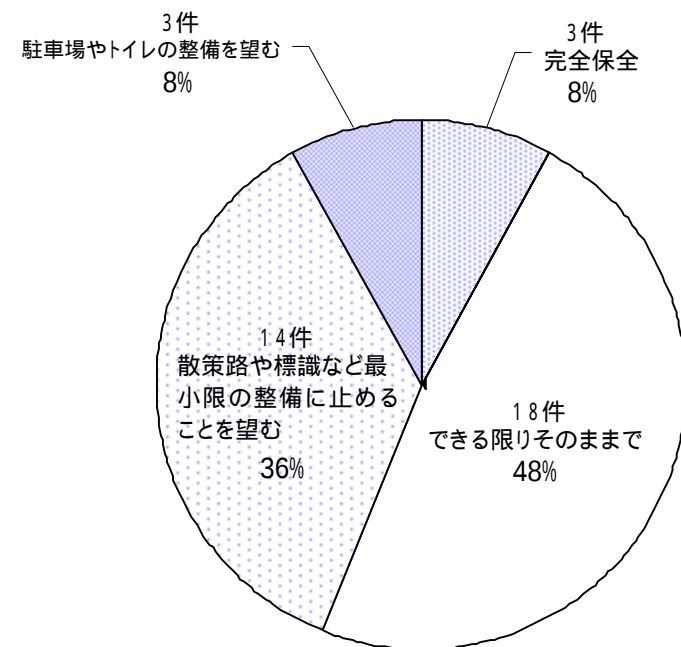


図 2 - 3 1 市民意見内容の分類
出典：「広報かまくら」（平成 17 年 4 月 1 日）鎌倉市

2) 基本計画における検討事項

基本計画策定にあたり、上記の意見・要望のほか、基本構想確定に至る経緯の中で出された本緑地の保全に対する意見の中から、基本計画でその詳細を検討すべき要素として、以下の項目を抽出した。

この内容について検討し、基本計画における計画案に反映していくこととする。

- 出展資料
- 平成 18 年 3 月（仮称）台峯緑地基本構想（素案）市民説明会用資料説明会の資料について提出された主な市民意見と反映内容等
 - 平成 18 年 6 月（仮称）台峯緑地基本構想素案市民説明会で出された意見とその対応方針
 - 平成 18 年 6 月（仮称）台峯緑地基本構想素案に対し台峯保全連絡会より出された意見とその対応方針
 - 平成 18 年 7 月（仮称）台峯緑地基本構想案で出された意見とその対応

表 2 - 8 市民意見の概要と回答

●凡例 ■；意見の概要 →；市の回答 P00；（仮称）台峯緑地基本構想 2006 年 7 月での掲載ページ番号

資料名	整理番号	市民意見の概要と回答
計画全般にかかわる件		
	42	■中央公園とは違った整備を（人工的な公園は不要） →考え方は市も同様。基本計画・基本設計において具体的な内容を図化する。
	27	■ゾーン区分（P35）（ ）樹林地の構成についての提案 ；無理に区分せず、場所に応じた管理方針を適宜考えては？ →基本計画・設計策定時に重要な要素として取り入れる。
	28	■ゾーン区分（P35）（ ）湿地の構成についての提案 ； の湿地にはもと畑であったアズマネザサ群落が広い面積で存在する。利用可能な土地であるにもかかわらず、何も記述がないため、今後の方針を明らかにする必要がある。 →基本計画・設計策定時に重要な要素として取り入れる。モニタリング調査の手法を駆使しながら保全手法の検討を行っていきたい。
保全・活用にかかわる件		
	21	■保全・活用に向けた課題と評価（P25）についての提案 「樹林の保全と健全化に向けた課題」；二次林の面的な管理は実現可能か 「湿地の乾燥化に対する管理」；湿地の乾燥化に対する管理方法の模索が必要 「放棄された農地の管理」；原っぱ等として、利用も考えてはどうか →P51 において基本的に管理に関する課題として、モニタリング調査を基本として、方向性を模索していくことが必要とした。基本計画・設計策定時に重要な要素として取り入れる。
	23	■保全・活用に向けた課題と評価（P26）についての提案 ；水路の侵食（洗堀）が問題になっている 資料 でも同意見あり。 →基本計画・設計策定時に重要な要素として取り入れる。
	26	■保全活用方針（P33）についての提案 ；市民利用のための活用方針において線的な利用を主としながらも、線と点で活用してはどうか →基本計画・設計策定時に重要な要素として取り入れる。
	31・32	■耕作放棄地・畑の整備方針（P38）への提案 ；災害に強い森林をつくるための苗木畑が必要。 アズマネザサで覆われた畑跡地は多様な草地に移行するべき。 →基本計画・設計策定時に重要な要素として取り入れる。

資料名	整理番号	市民意見の概要と回答
動線にかかわる件		
	78	■ 動線計画 ；ユニバーサルへの考え方は検討の余地あり → P39～42 で編集済み。現況の自然環境を損なわない範囲で、今後新たな視点を持って、課題解決に向けて市民とともに検討していく。（構想 P39 より）
	24	■ 中央公園との動線の連携が必要 → 基本計画・基本設計において今後詳細を検討。
湿地・水路の保全にかかわる件		
	73	■ 湿地の乾燥、水路の洗掘に対し保全対策を → 「流れの洗掘対策や護岸などの補修と湿地再生に取り組む」ための詳細を今後検討。
	53	■ ハンノキ林周辺の湿地の保全 → 市も同意見。モニタリングの手法を活用するなどの方策を中心として、今後詳細を検討。
施設整備にかかわる件		
	80	■ 施設導入計画；施設配置に関する具体的な提案 → P44、45 で編集済み。今後詳細を検討。
	28・35・81	■ 湿地の保全；利用制限、湿地に道を通さない、人工物設置不可 → 基本計画・基本設計において今後詳細を検討。
	27	■ 山崎小学校の水田の扱い → P37 では水田を体験学習施設として位置づけている。今後詳細を検討。
	31	■ 既存畑の継承；現在畑をやっている人がそのままできるようになれば素晴らしい。 → 詳細を検討。整備方針は構想に反映済み（P38）
	30	■ 施設の提案；便所；バイオマストイレ → 原則は公共下水道接続との方針であるが、今後詳細を検討。
	23	■ 管理棟の機能の提案；若い人は子どもを遊ばせたり、着替えができる場所がないと管理に参加しづらい → 基本計画策定時に 1 案として検討。
管理運営にかかわる件		
	29・32・39	■ 維持管理等作業の主体 → 今後詳細を検討。維持管理、モニタリング調査は協働を含めた市民参画が欠かせない。
	41	■ ペットの持ち込み、野良猫の野生化 → 詳細を検討。
	52	■ 状況に応じた柔軟な仕組みづくりを → 市も同意見。詳細を検討。
	54	■ 計画の内容を実現するための人材育成が必要 → 今後詳細を検討。
資料の作成にかかわる件		
	5	■ 希少種の保護 → 今後詳細を検討。